

吉井源太と明治

《31》

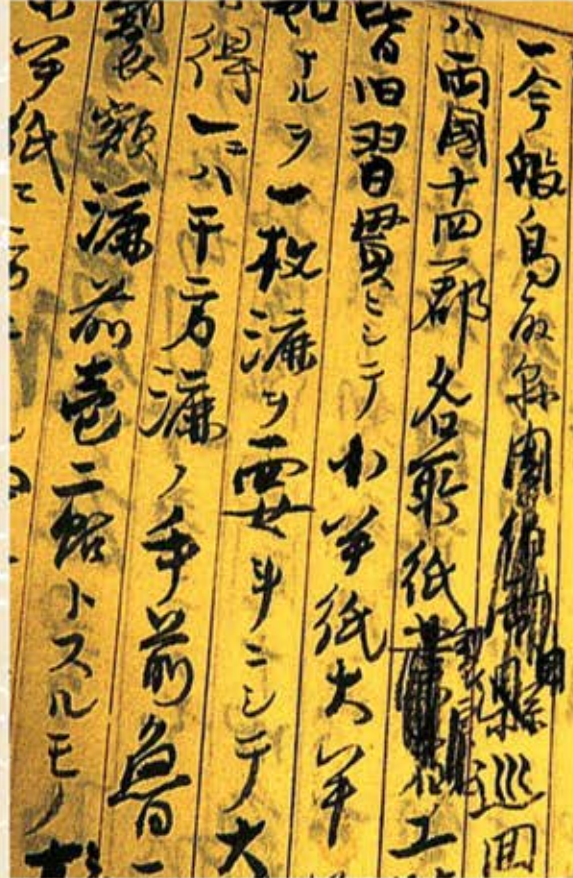
別れ惜しむ人々

二カ月あまりを鳥取各地での巡回指導に携わって、吉井源太は五月十一日に鳥取を発つことになる。

出発前日には鳥取県知事に呼ばれて面会し、書状や慰勞金を渡される。巡回教師の指導料は規定で決められたものであり、教師料または給料と呼ばれていた。

この慰勞金というのは、それとは別に、まさに労をねぎらう意味で知事から手渡されたものだっただろう。

また、鳥取県内各地への巡回指導中、ほとんど常に同行してきた、鳥取県の係員があり、これらの人々から料亭へ招待されている。これも役目からだけではなく、長い巡回の中で培われた親近感のようなものもあっただろう。



明治20年の日記に残された、鳥取巡回指導の報告 (いの町紙の博物館蔵)

だ。午前十一時に宿を出発。しかしすぐに同じ人々とまた酒席をもうけている。夕方に岡山県との境の坂根に到着するのだが、その人々も同地まで送り込みに来ている。源太はここで一泊する。

翌日夕方に姫路へ到着する。往路とは季節が違い、雪による困難がなかった。姫路で一泊して、次の日に明石、須磨へと来た時と逆のルートをとらざる。この時は須磨寺を拝観したりもした。このあと、神戸から汽車で大阪へ出た。

同郷で、親しい間柄であったと思われる近谷武之助という人がこの時大阪に滞在していた。この日は、この家に泊まった。翌日、銅線会社に行き、見本を受け取ると書かれている。質桁に用いる材料の見本を集めていたのかと思われる。

また、懇意にしていた大阪の原料商も合流して書画を書いたり、午後十一時頃から北新地で酒宴を開いたりしている。北新地は今も大阪の高級歓楽街となっている場所だ。

源太は地方での長い巡回を終え、気心の知れた知人たちに会って、一度に緊張を解いたということだろう。この時、源太は動けないうほど酔ってしまったと書かれている。翌朝早くに帰ったらしい。帰って、昼まで寝たあと、午後に博物館へ行った。

夕方には汽車に乗って神戸まで帰る。翌朝、楠公社(湊川神社)へ参詣する。楠正成を祭った神社であり、その忠誠に思いをめぐらして、また句を作ったりしている。

高知へ帰ってから県庁へ出した報告書には、次のようなことが述べられている。鳥取県東部・西部の十四郡を巡回し、各所で製紙工場を検分しましたところ、皆旧習で、半紙や美濃紙を一枚漉きしているばかりです。また、漉き・干しの手が遅く、一日に少しの量しか漉くことができていません。紙業家は衰微の至りというありさまでしたが、巡回教師として大型質桁を奨励し、また原料栽培について論じたところ、人々は大いに関心を示しました。鳥取県における産額を増大させる時が来たと思われ、でも大賛成でした。人々は組合や会社を設立する準備、また土族授産の工場を建設する費用の見積もりなどを始めています。